

# 同時代を生きるための中国語

—必修および自由選択科目における時事中国語教育—

谷野 典之

## 我々はどんな世界に住んでいるのか

世界像ということを考えてみる。地球は丸くて孤独で、そのうえ環境問題や民族紛争、宗教対立、飢餓、戦争に直面しつつ、それでも世界中に人類は繁栄して、とりあえず平和な生活もあって、アメリカと聞けばいちおうどんな国かが頭に浮かび、中国と言えはそれなりにどんな人々が暮らしているのか想像がつく。私たちはこの世界がどんな場所か、現在がどんな時代かを、知っている。行ったこともないのに、世界がどんなものなのかを、知っている。自分で見たこともないのに、世界がどんな場所かを、知っている。なぜ知っているのだろうか？自分のなかの世界像は、どのような成り立ちをしているのだろうか。

私たちの描く世界像は、ほんのわずかな自身の体験に由来する部分を除けば、そのほとんどがメディアから受け取る情報によって成り立っている。私たちの場合、その情報はほぼ全てが日本語を介してやって来る。だから私たちの世界像は、そのパーツのひとつつ

とつに日本語が刻印されており、日本語で表現できない部分は実は最初から取り除かれていることになる。さらに情報の商業性、政治性といった社会的要素が加えられて、私たちの世界像ができあがる。だから、同じ地球に住み、同じ時代を生きていても、日本人である私たちと中国に住む人々とが考える世界とが、実は違っているということだ。確かだと思っている世界像は、実はひとつではなく、向こう側から見ればまた異なった世界が見える。それを見てみよう。かならず発見があるはずだ。というような話を、私は授業の前にいつもすることになっている。時事中国語を学ぶことが、単に中国の新聞が読めたり、ニュースが聞けたりといったスキルの向上だけにとどまらず、もうひとつの大きな世界への扉を開けることにつながることを、知ってほしいからだ。

## 生の中国情報にアクセスする

中国語はおおまかに言って、話しことばと書きことばに分かれる。世間で言う中国語とは、普通は話しことばと

しての中国語を指す。立教大学で教えている中国語も同じだ。ところが時事中国語は、書きことばの一つのスタイルであり、話しことばとはだいぶ様相がことなる。つまり、たとえ、話しことばがかなりできるようになったとしても、そのままでは時事中国語を理解することはむずかしい。やはり時事中国語を読めたり、聞けたりするようになるためには、それにふさわしい勉強方法とアプローチが必要となる。

今は昔、私が学生だったころは中国語の新聞、たとえば人民日報などは船便で一か月遅れで届くものだった。放送メディアともなると、ラジオの中波や短波のうねるような雑音の向こうからかすかに聞こえる北京放送が頼りだった。

今はインターネットのおかげで、即時的に中国語の新聞が読める。日本とちがって、中国の新聞はインターネット版の方が紙媒体よりも圧倒的に情報量が多く、個別のニュースに対して読者が自分の意見を書き込める掲示板や、アクセス数の多い記事のランキングなど、インターアクティブな工夫がされており、生の中国情報に触れるにはきわめて便利になっている。放送メディアも、インターネット放送によっていつでもニュース番組をチェックできる。また日本の衛星放送では、24時間中国語の番組を流すチャンネルもある。そしてNHKラジオでは、毎日10分間だけだが、中国語ニュースを放送

している。このように時事中国語に触れるチャンスがいくらかでもできてきた。あとはそれをどう利用するかという問題だけだ。

## 中級中国語としての時事中国語

立教大学の中国語カリキュラムでは、1年次の一年間と2年次の前期を通じて、中国語の初級文法のほぼ95%程度を学び終える。中国語の場合、初級文法ではほぼ中国語の骨格となる部分がカバーされている。つまり文の構造（文法）に関する限り、初級文法を修了すれば、どんな内容の文章であろうと読みこなしていけることになる。その段階までは統一教科書を使い、内容的には文法項目をたどりながら会話体の文章を中心に学んでくる。そこまでは言わば中国語というゲームに参加するための、ルールを覚える段階である。だから私は授業では、教科書はルールブックだと説明している。ルールブックを実技を交えながら学んできているのである。スポーツと同じで、語学もルールの複雑な言語もあれば、シンプルな言語もある。アメリカンフットボールのルールは複雑だが、サッカーのルールはシンプルだ。その意味で、中国語はサッカーと同じようにシンプルなルール（文法）によって規定されている。ただし、ルールがシンプルならそのスポーツは容易かと言えば、そうではない。言語でも同じである。

さて、中国語の初級文法が修了した

ということは、ルールブックを一応理解したということだ。では、ルールブックを読みこなして内容をすべて理解したら、そのスポーツをマスターしたと言えるだろうか。もちろんそんなことはない。ルールはゲームのために存在するわけだし、またルールの意味を本当に理解するためには、ゲームに参加しなければならない。よろしい、靴を履き換えてグラウンドに立ち、ゲームを始めよう。私が審判になり、もし選手（学生）がルールに違反したら笛を吹いて注意を喚起する。なんどかやっていたらゲームの進め方が飲み込めて、やがて意識しなくてもルールを守ってゲームに夢中になれる時が来るだろう。そのゲームとは、生の、活きた中国語に触れることにほかならない。

この段階で学ぶ中国語のなかで、時事中国語がもっとも語学力を高めるのに適した材料であると、私は考えている。時事中国語は、誰が読んでも誤解なく読み取れるよう、文の構造が明確でしっかりしている。さらに、シンプルな構造に複雑な修飾語がつくという、中国語の特徴がよく出ている。そして当然のことながら、内容は高度に現代性を帯びている。言語の学習においては、どのように表現するか（How）とともになにを伝えるか（What）という両面が必要なのは言うまでもない。よく学生が、中国語を話せるようになりたい、なれるでしょうか？と聞いてくる。なれるよ、と私は答える。

それから相手の顔を見ながら、で、なにを話すの？と反問する。答えられる学生は、ふつうはいません。

時事中国語のいい所は、それを通じてこの時代を中国語でどう表現するかを学べる点にある。SARS、鳥インフルエンザ、宇宙開発、イラク戦争、インターネット、携帯電話、差別、汚職、ファッション、ベッカム、これは単にそれを中国語でなんとと言うかを知っているということではなく、この同時代のキーワードを共有することにつながっている。中国語を話せるようになることが目的ではない。中国語で、この時代を語れるようになることが目的なのだ。

### 必修授業での時事中国語の学び方

テレビ、ラジオなどの中国語のニュースは、文体としては新聞記事と同じ時事中国語のスタイルをとっている。そのため中国語ニュースを聞き取ろうと思えば、まず段階として中国語新聞を読む練習をしたほうがよい。上述したように、立教大学の中国語カリキュラムでは2年次前期まで統一教科書を使って会話体の中国語を学ぶ。2年次後期になると、必修科目としての私のクラス（中国語3A2）ではすぐに生の中国語新聞を読む授業を始める。それまでとは、まったくレベルの異なった中国語に接して、学生は例外なくどまどい、むずかしすぎる、自分には無理だと尻込みする。しかし、ゲームに

参加するというのはそういうことだ。スキーのレッスンを受けたあと、はじめてリフトに乗って斜面の上に立つことを想像してみれば、たぶんそれがこの時の学生の気持ちに近いはずだ。

はじめはゆっくりと、しかし基本的に忠実にトレーニングを重ねていくことで、複雑なゲーム（時事中国語の読解）も基本的な技術の組み合わせと、全体を見るという状況判断によって成立していることがわかってくる。この段階で、話しことばと書きことばの差、辞書の使い方、人名・固有名詞・新語などの辞書に載せられていない時事的単語などを学ぶことになる。簡単な例を挙げてみよう。印刷の便を考慮して、中国語の字体（簡体字）を日本漢字に置き換えて示す。たとえば、こんな見出しがあるとする。

### “以色列総理沙龍抵達華盛頓將与布什進行會談”

一年半中国語を学んできたどんなに優秀な学生でも、この文字列を見て自分で辞書を引いて、正しく意味をとれる者はいない。辞書を引こうにも、どこが単語の切れ目なのかわからないし、それがわかったとしても、以色列、沙龍、華盛頓、布什は辞書には載っていない。わかるのは、会談が行なわれた（らしい）ということくらいだろう。しかし、実際にはその会談も、まだ行なわれてはいない。この内容を日本語と対応させると、「イスラエル [以

色列] のシャロン首相 [総理沙龍] はワシントン [華盛頓] に到着 [抵達] し、ブッシュ [布什] と [与] 会談を行なう [進行會談] ことになる [將]。このうち [抵達], [將], [与] は書きことばであって、話しことばでは使われない。

文法的にはこの見出しは、主語＋動詞＋目的語という構文と、助動詞＋前置詞構造＋動詞＋目的語という構文がつながったものだ。どちらの構文も、それぞれ文法としては1年次前期、1年次後期に習った基本的な構文だ。骨組みのしっかりした基本的な構文に、書きことばの要素と時事単語が組み合わさったもの、それが時事中国語なのだ。私は中級学習者には、この「骨組みのしっかりした基本的な構文」を素材としてトレーニングすることが最も重要であると考えている。そのトレーニングを通じて、漢字や単語にひきずられることなく、文法的・構造的に中国語を理解するスキルが身につくと考えているからだ。このスキルがあれば、具体的な場面でどんな中国語に接しても、冷静に論理的にそれを理解することができる。時事中国語のスタイルは、中国語の書きことば全体に応用することができるから、論文、論説、評論から手紙文や電子メールまで応用範囲は実に広い。読解だけでなく、ライティングにおいても「骨組みのしっかりした基本的な構文」を組み合わせることで、大人にふさわしい立派な中国語を

書くことができるようになる。さらに時事単語と時事的表現を理解することで、たとえばイラク [イラク] における自爆テロ [自殺性爆炸恐怖事件] について、中国語で語るができるようになるのである。

## 2 年次後期授業での教材と授業方法

ニュースは生のものだ。鮮度が命だと私は思っている。だから私の授業では、つねにその週に起きた事件をとりあげ、時間的に可能な範囲で最新のニュースを素材として提供している。2003年度の場合例えば、SARS、イラク戦争、中国初の有人宇宙ロケット、靖国参拝問題、広東省珠海市における日本人による集団買春事件、西安の西北大学における日本人留学生が引き起こした寸劇事件、イスタンブールでの爆弾テロなどを取り上げてきた。いずれも生の中国語ニュースをそのまま使い、学生の予習の能率を考慮して単語を分かち書きに、さらにそこに中国語の表音文字であるピンイン（中国の発音のアルファベット表記）をつけたものを毎週プリントして配布する。学生はそれを一週間かけて予習してくるようになっていく。

ことにはなっているけれど、そのままではふつう予習してくる学生はいない。予習の内容を評価できるシステムがなければ、がんばって予習しようという気にさせることはむずかしい。そこで私のクラスでは、毎授業時に予習

内容をチェックする小テストを行なっている。辞書を引いているか、文の構造を理解しているか、適切な日本語の表現に置き換えられるかという三点について、20点満点の小テスト問題をプリントして授業の最初に実施する。この小テストは翌週までに私が採点して返却する。それが平常点になるから、予習しないわけにはいかないし、努力すればすぐにそれが点数として評価になって返ってくる仕組みである。

また授業時には毎回、その授業で取り上げるニュースの全文をカバーしたワークシート形式の講義ノートを配布し、学生はそのワークシートを埋めながら授業を受けることで、授業終了時にはそのニュースに含まれる全ての時事単語の意味を知り、文の構造を理解し、適切な日本語の表現に置き換える方法を学ぶことができるようになっていく。こうした配布教材は、たとえば2003年度後期について言えば、一クラスにつきニュース教材二十ページ、小テスト十回十分枚、講義ノート二十ページであった。

## リスニングに特化したトレーニング

ここまで必修科目の範囲で時事中国語をどのように教えてきたかということの説明してきた。しかし、この範囲ではできないことがある。なにか？それはリスニングである。たとえば必修科目の段階で時事中国語の文体にある程度慣れることができれば、ニュース

番組で読まれる原稿は、基本的に新聞と同じであるから、それをそのままリスニングの材料に使えるはずだし、必修科目の時間ではどうしても充分には達成されない音声としての中国語を学ぶにはよい素材である。これまでも私は、必修科目の時間内でも時折リスニングの要素を取り入れてきたが、2003年度から自由選択科目として、中国語セミナー5（前期科目）、中国語セミナー6（後期科目）が開講され、それを担当することができた。

素材はいろいろ考えた末、リスニングの入門としてNHKラジオ第二放送の中国語ニュースを使うことにした。この中国語ニュースはNHKの国際放送が、NHK WORLD Daily Newsとして英語をはじめとした8言語で放送しているものの一つである。毎日午後一時から十分間の放送時間に、文字にして四百～五百字、時間的には一分から一分半ほどのニュースが数本流される。分量としても適当で、内容も日本でその日に流されるニュースと重なる部分が多いため、内容の見当をつけて聞くことができるというのも、入門素材としてメリットになる。

授業が月曜日なので、その前日か前前日、つまり土曜日日曜の放送をMDに録音し、それを編集して一～二本のニュースだけを取り出しておく。さらにそのニュースを文字に起こし、受講者のレベルに合わせて穴埋め式のワークシートを作成する。固有名詞や時事

単語は、最初に登場する一回目だけは文字を残して、目で見て判断できるようにしておき、二度目からは音声を聞いて穴埋めするよう空欄にする。L.L.教室を使い、学生には最初にこの授業用のカセットテープを用意させ、授業時に教卓側から新しいニュース素材を送出し、それを各自のカセットテープに録音する。それを持ち帰って、録音を聞きながら自分のペースでワークシートを埋めてくる。翌週、そのワークシートにもとづいて自分の聞き取りが正確だったかどうかを授業のなかで確認する。

リスニングと言っても、一～二回聞いてその内容についての質問に答えたり、あるいは自分でその内容をもう一度言ってみたりという形式の授業ではなく、むしろディクテーション（書き取り）という作業になる。中国語は漢字で表記されるために、聞き取り能力と書き取り能力のあいだに、はっきりとした相関関係が見られる。つまり聞いてわかる時には書き取れる、書き取れる時にはわかっているという関係がある。穴埋め式のワークシートはその関係を利用した練習方法なのである。自由選択科目ということもあって、受講生のモチベーションも高く、半年のトレーニングで確実にレベルアップが見られた。

## 受講生の反応

一方の必修科目の枠内での時事中国

語学習では、現代的な内容が学べてよかつた、力がついたと思うといった肯定的な評価があつた反面、受講者のモチベーションにもばらつきが多く、厳しすぎるといふ声も少なくなかつた。これに対しては、時事用語や固有名詞などの辞書にない語彙に関して、あらかじめその意味を注釈の形で教材に埋め込むなどの方法を考えたい。

また会話とは違ふアプローチで中国語のレベルアップを図るといふ授業の意図が理解されず、やはり会話がやりたかつたといふ声もあつた。時事中国語もやり、リスニングや会話もやるとなると、週一回、半期十一回の授業ではとても目標は達せられない。結局誰にとつても不満足なものに終つてしまふ可能性がある。的を絞つて、時事中国語の範囲に特化して必修科目としての中国語の最後の半年間を過ごすといふコンセプトをどのように受講生に理解してもらふか、引き続き考えてゆきたい。

たにの のりゆき  
(全カリ中国語科目担当,  
本学経済学部教授)